

4-2 供養された江戸時代の麦丸の人々 —大日前の詣り墓とその裏山の供養塔調査から—

蕨 由美

1. はじめに

麦丸村の成立については、寛永16年(1639)に旗本曲淵氏が領し(注1)、寛文期(1661～73)と推定される国絵図に村名が見え(注2)、元禄2年(1689)の年貢割付状に米100石永7貫594文が課されている(注1)ことが知られている。

石造物では、享保15年(1730)銘の麦丸字新田の地藏菩薩像塔と東福院の享保18年(1733)銘地藏菩薩像塔があり(注3)、元文5年(1740)からは庚申塔と十九夜塔が建てられるなど江戸中期のムラの講の活動が見えてくるが、江戸前期は不明である。

そこで、麦丸村の江戸前期を含むムラの様相を知る手がかりとして、字大日前の通称「セイマイ前墓地」の多数の墓塔(注4)と、その裏山にある個人の造立による石仏2基を調べることにした。

調査は、2016年3月25日から8月26日まで、蕨由美・畠山隆・牧野光男・村田一男・鈴木千代・菅野貞男・藤村誠枝・宮井雄二・中島和子の会員が参加して行い、173基の供養塔の形態、年月銘や位号銘などを調査した。

本稿では、その調査データと、江戸時代の麦丸に生きて死後供養された人々の推移と構成について報告する。

2. 調査した墓地と裏山の石仏について

今回調査した字大日前のセイマイ前墓地と石仏のある裏山は、2007年6月の八千代市立郷土博物館主催の見学会の際、講師の村田一男館長(当時)に案内されて知った深い森の中にあり、そこは麦丸草分けの先祖の記憶が眠っているような佇まいであった。

墓地は、東福院から吉橋方面へ150m行って左に入ったところにあり、鬱蒼たる森の中に百数十基の墓塔が小道の左右に並んでいる。この墓地が通称「セイマイ前墓地」と呼ばれるのは、墓地入口が精米所を営んでいた屋号「セイマイ」家の向かい側にあったからとのことである。(注5)

セイマイ前墓地の小道を抜けて木々と竹藪の中を登っていくと、裏山の台地の先端に青シートで屋根を覆った木製の祠がある。Y崎家(屋号ミセ)が祀る「子神(ねのかみ)さま」で、基礎石には「明治廿七年十一月吉日」の銘と「當社再建寄附連名」として数十人以上の氏名がある。かつてはムラの人々の信仰を集め、安産祈願にお参りする人も多かったというが、今は森の中にただ眠るように鎮まっている。

この子神社の左前方に、丸彫りの大日如来像、その手前に光背型の阿弥陀如来像の、ともに寛文11年(1671)銘の石塔がある。

まずは、村田一男当会顧問の調査データを参考に、この裏山の2基の石仏から紹介し

たいと思う。

3. 子神社前の寛文 11 年銘の大日如来像塔と阿弥陀如来像塔

子神社の左前の丸彫りの石仏（表 1）は、法界定印を結び、理を表す胎藏界大日如来の坐像である。安山岩系の硬質の石材を用い、蓮座に座して衲衣を偏袒右肩にまとう姿の均整のとれた彫像で、今も神々しさを保っている。

蓮座の正面蓮弁に銘があり、江戸時代前期の寛文 11 年（1671） 3 月 28 日に「源左門」が造立したことがわかる。この造立年月日は、麦丸のムラの講による石造物の造立より数十年古い。

「源左門」は、Y 崎家一族の屋号「ミセ」家の家名が「源左衛門」でもあることから、「ミセ」家の先祖であろう。また、「大日前」の小字名は、おそらく大日如来像塔に由来し、この石塔は、江戸前期の麦丸で「源左衛門」家だけではなく、広く村人の信仰をあつめていたと推察される。

表 1 大日如来像塔

造立：寛文 11・3・28（1671） 像容：胎藏界大日如来坐像 丸彫型 高さ： 104 cm	
正面蓮座銘文	
（アーンク） 寛文十一年 亥三月廿八日 奉造立石 佛之大日一 尊願望 成就処 敬白 源左門	
	

この大日如来像塔の前方やや下に立っているのは、阿弥陀如来立像塔（表 2）で、舟形光背型、如来の手は親指と人差し指で輪を作る来迎印を示す。

銘によれば、大日如来像塔造立の約 4 か月後の寛文 11 年 7 月 17 日造立で、おそらく

当時は大日如来像塔が莊嚴に祀られていて、その前に「浄清禅定門」の供養のためのこの塔を造立したのであろう。「三十三廻忌」の銘から、浄清禅定門の没年は32年前の寛永16年（1639）で、領主曲淵氏が支配した年でもあった。施主は浄清禅定門の子か孫で、大日如来像塔を造立した「源左門」であろう。

表 2 阿弥陀如来像塔

造立：寛文 11・7・17（1671）	像容：阿弥陀如来立像 光背型 高さ：90 cm
（梵字ア）爲浄清禅定門三十三廻忌菩提（異体字）也 （阿弥陀如来立像） 寛文十一亥天七月十七日施主敬白	

4. 「セイマイ前墓地」の墓塔群の調査

セイマイ前墓地は、一見して江戸前期と見られる五輪塔や丸彫像、板碑型を含む多数の墓塔が並んでいることから、江戸期初頭の麦丸の歴史を知る手がかりが得られるかもしれないと、とりあえず江戸中期以前の年銘のある墓塔を探し出す簡易な調査を行った。その結果、江戸前期の万治3年（1660）から享保4年（1719）の銘のある墓塔が61基あり、その年銘はすべて故人の命日と戒名のみで、建立年銘を刻んだ墓塔はないこと、また中世に遡る板碑や五輪塔もないことがわかった。

またこの墓地は、供養のための石塔のみで遺体を埋葬しない両墓制の「詣り墓」で、「ラントウバ」とよばれ、今もお盆にはガラガラに蓮の葉のオゼンをのせアラレを盛り、香華をたむけている。ちなみに「埋め墓」は、現在は整備されて麦丸の各家の現代墓地になっている日枝神社南西の共同墓地であったという。（注5）

さらに江戸時代を通して営まれたこの詣り墓は、明治時代の墓塔は2基のみで、また近代の墓制の「〇〇家之墓」はなく、その後の墓地整理などの改変を受けていない貴重

な事例であることから、全数の年銘、戒名の位号、形態、像容にわたって追加の調査することにした。

この調査による集計の結果、墓塔数は173基、うち2名連記が21基、3名連記が3基の複数名の墓塔があり、被供養者の人数は総計200名であることがわかった。

この173基については、年銘（複数名は後の年銘）による時代区分と、位置（群）、形態、像容について、また被供養者200名については、年銘による時代区分と位号とそれによる男性・女性・児童の別について分析を行った。また、年銘が古い墓塔や特徴ある墓塔、像容の優れている墓塔などは、銘文など詳細な調査も行った。

なお本稿では、江戸時代の前期は1660年、中期は1720年、後期は1780年、幕末・近代は1840年から、すべて60年間ずつの区分とした。



写真1 墓塔の調査

(1) 墓地内の墓塔群とその様相

墓地内の墓塔群をA～E群に分け、さらに数の多いA～C群は列ごとに集計した。（表3）

この結果、墓地左側のA～C群は雛段状の斜面で、最後列に年銘の古い墓塔が集中し、前の方ほど新しく、さらに、向って右側のD群では、幕末・近代の比較的新しい墓塔が多いことがわかった。またE群の子神社の右脇の小道沿いは7基のみであった。

聞くとところによると、A群はI井家（ジロエム）のみ、B～D群はY崎家一族のホンゴウ・ジンゼム・サンニム・シンタク・シンロク・エイジュウなどの7～8軒の家の墓地であり、I井家とY崎家一族以外のS郷家やS井家一族などは、ここではなくそれぞれの墓地が別にあるという。（注4）

この中で最も古い年銘の墓塔は、B群最後列の左側の万治3年（1660）銘の五輪塔（表4左）で、右側の寛文2年（1662）銘の五輪塔（表4右）がそれに次ぐ。

その間にある寛文10年（1670）銘の板碑型石塔（表5左）、C群の延宝2年（1674）銘の阿弥陀如来像塔（表5右）、A群の延宝4年（1676）銘の板碑型石塔が続く。

表 3

場所		年銘の時代区分別基数					
群	列	前期	中期	後期	幕末・近代	不明	計
A	最後	5	2		1		8
	後	2	1			2	5
	中	1		2			3
	前	0	2	2		2	6
B	最後	11				1	12
	後	2	6	3		1	12
	中	2	6	1	2	2	13
	前	4	2	3			9
C	最後	14	5				19
	後	7	10	7			24
	中	4	5	1		2	12
	前	2	3	6	2	1	14
D		1	3	6	16	3	29
E		3	2			2	7

子神社

E 群

↑子神社への長い登り道

D 群

↑入口

C 群

最後列

後列

中列

前列

B 群

最後列

後列

中列

前列

A 群

最後列

後列

中列

前列



写真 2 B 群の墓塔

表 4

万治3年（1660）銘五輪塔		寛文2年（1662）銘五輪塔	
萬治三年 庚子 （ア）爲道鏡禪定門 五月一日 施主 菩提 （異体字） 也 敬白		寛文二年 （ア）爲道鏡禪定門 壬寅 （異体字） 七月晦日 位 靈 （異体字）	

表 5

寛文10年（1670）銘板碑型石塔		延宝2年（1674）銘 舟形光背型 阿弥陀如来像	
寛文十天 （キヤカラバア）妙真禪定尼 菩提 （異体字） 也 九月八日		爲永栄菩提也 施主敬白 （キリーク）（阿弥陀如来像） 延宝二甲寅天 六月五日	

(2) 墓塔の形態・像容と時代区分

この墓地の 173 基の墓塔の形態は、五輪塔 2 基・丸彫型 2 基・板碑型 19 基・舟形光背型 60 基・駒型 3 基・角柱型 13 基・隅丸角柱型 58 基・変形型 1 基・不明 15 基で、その時代区分は表 6 の通り。このうち像容のあるのは丸彫型と舟形光背型である。

江戸前期は舟形光背型の石仏と板碑型の石塔が主流であり、また五輪塔 2 基と丸彫型石仏 2 基は江戸前期のみである。

中期は、舟形光背型の石仏も多いが、隅丸角柱型が主流になり、後期以降は隅丸角柱型と角柱型がほとんどを占めるようになる。

表 6

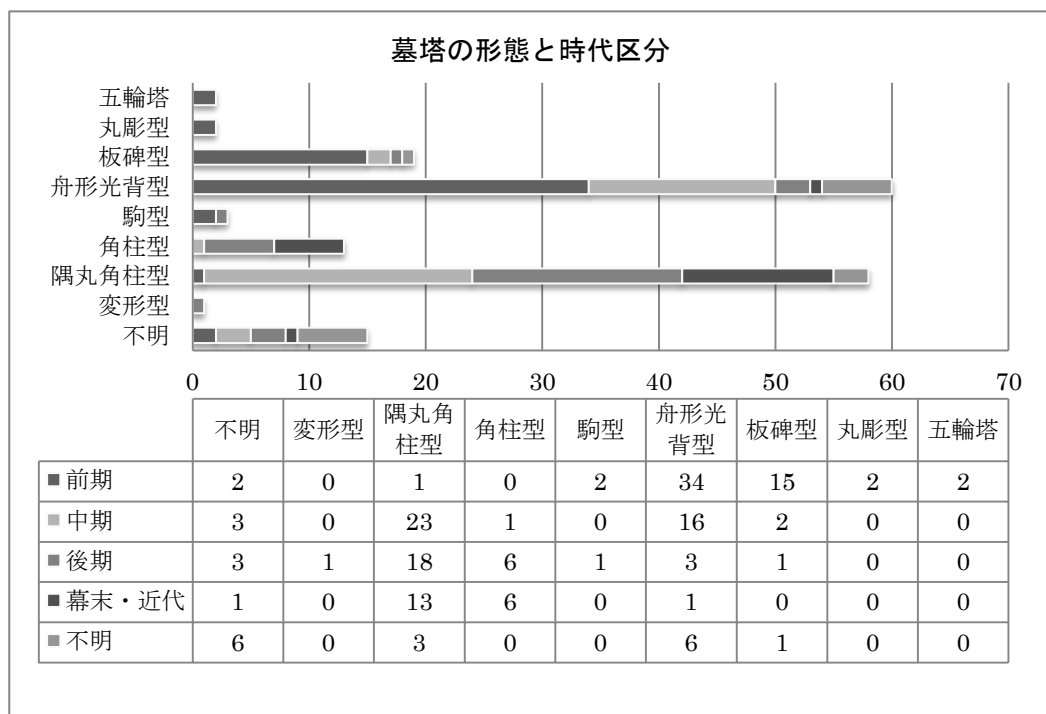


表 7

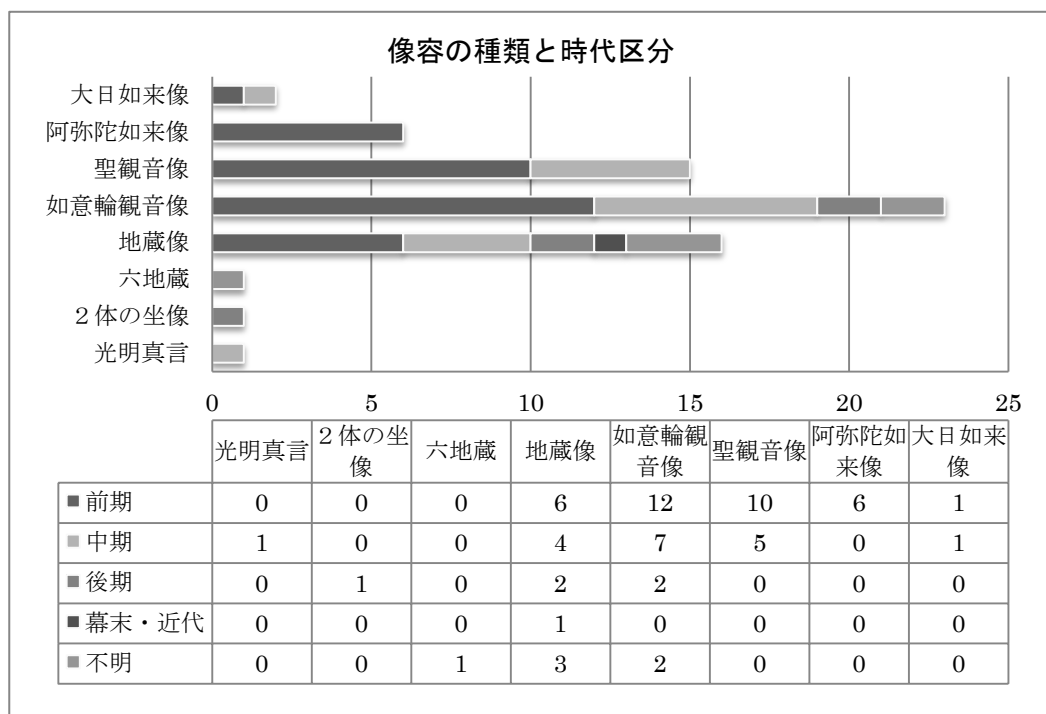


表 8

		
丸彫型 大日如来像塔 「泰平浄安信士／宝永七庚寅／十月十二日」 (1710)	舟形光背型 如意輪観音像塔 「静感院覺峯妙契信女／享和十一丙午天／八月廿九日／施主(弥〇〇)」(1726)	隅丸角柱型 光明真言塔 「寶曆五乙亥年／妙蓮信女靈位／四月九日」(1755)

丸彫型または舟形光背型で彫像のある石塔は、173 基中 78 基で、うち不明を除く 65 基の像容は、表 7 の通りである。

阿弥陀如来像 6 基と大日如来像 2 基はすべて前期で、位号は信士と禅定門の男性のみである。一方、如意輪観音像は前期から後期まで 21 基あり、位号はすべて信女であった。聖観音像は前期 10 基・中期 5 基で男女ともにある。

地藏像は前期から後期まで 12 基で、童子・童女の子供の被供養者が多い。(中期までの地藏像塔については大人の戒名でも子供の可能性を推定する説もある。注 4.小川浩)

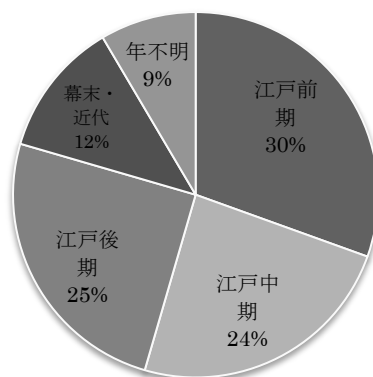
表 8 左の智拳印を結ぶ丸彫りの大日如来立像塔は、正徳年間に造立されたと推定される優れた彫像である。表 8 中の如意輪観音像塔は、この墓地の舟形光背の石仏では、高さ 82 cm 以上(下部埋没)と大きく、また「静感院覺峯妙契信女」と院号に 4 文字の戒名がある。院号が付くのは石仏ではこの 1 基と、幕末期の位号が信女の文字塔 1 基のみである。また判読不可であるが施主名があるのも珍しい。

表 8 右の隅丸角柱型石塔は、密教で唱える呪文(真言)の大日報真言 5 文字が中央に光明真言 24 文字が円形の輪内に刻まれた光明真言塔で、この墓地では唯一である。

表9 墓塔の被供養者の歿年銘と年代別・時代区分別の数

年代と時代区分	数
1660年代（江戸前期）	5
1680年代（江戸前期）	18
1700年代（江戸前期）	38
1720年代（江戸中期）	12
1740年代（江戸中期）	22
1760年代（江戸中期）	13
1780年代（江戸後期）	13
1800年代（江戸後期）	26
1820年代（江戸後期）	12
1840年代（幕末・近代）	19
1860年代（幕末・近代）	4
1880年代（幕末・近代）	1
年不明	17
総計	200

時代区分	数
江戸前期	61
江戸中期	48
江戸後期	50
幕末・近代	24
年不明	17



年銘の年代（20年毎）別の数

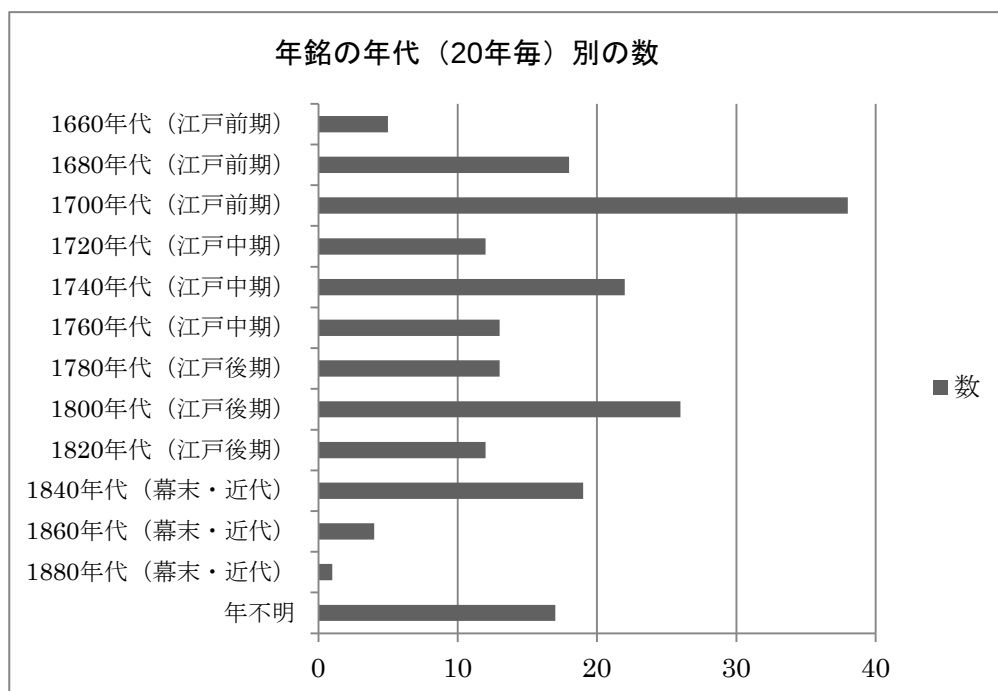
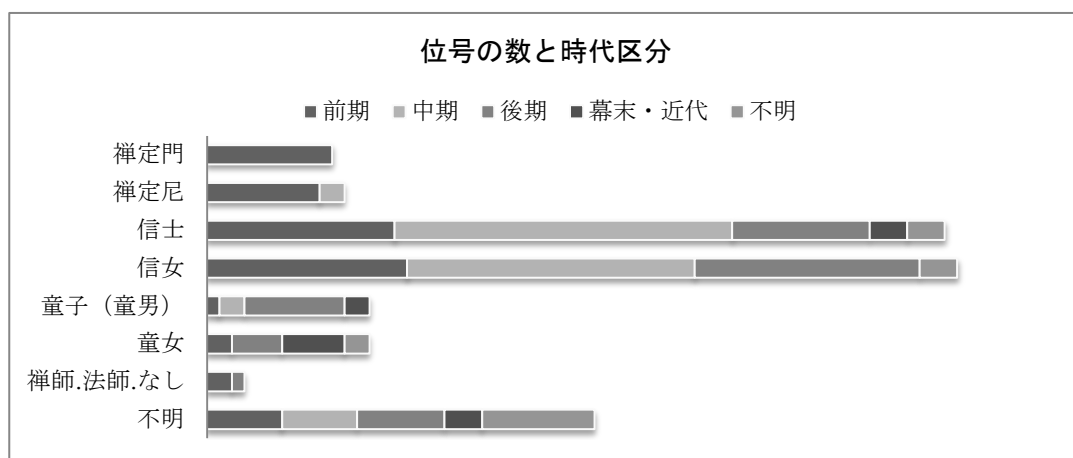


表 10 墓塔の被供養者の位号銘と時代区分別の数

位号銘	前期	中期	後期	幕末・近代	不明	計
禪定門	10	0	0	0	0	10
禪定尼	9	2	0	0	0	11
信士	15	27	11	3	3	59
信女	16	23	18	0	3	60
童子（童男）	1	2	8	2	0	13
童女	2	0	4	5	2	13
禪師.法師.なし	2	0	1	0	0	3
不明	6	6	7	3	9	31



(3) 被供養者の歿年銘と位号にみる江戸時代の麦丸の人々の推移

この墓地の173基に刻まれた被供養者200人の歿年銘と戒名の下につく位号銘のデータを年代別・時代別に集計を行ったところ、表9と表10の結果が得られた。

江戸時代の墓塔の特性として、造立年と造立者、被供養者の実名の銘はないが、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌の供養の際に、また夫婦連名の墓塔では、残された配偶者（多くは妻）の没後数年以内に造立が行われたと想定すると、造立年は概ね年銘の後20年以内のスパンで収まると考えられ、表9では20年毎の数をグラフ化してみた。

麦丸での石塔の造立は、この墓地の裏山の寛文年間の石仏で始まるが、北総においても寛文元年（1661）ごろから、ようやく石塔石仏の造立が普及し始める。麦丸のこの墓地でも寛文・延宝期から造立が盛んになり、元禄・宝永・正徳期には、父母の菩提を手厚く供養するための墓塔造立がピークとなる。この頃まで位号は、男性が禪定門、女性が禪定尼で、宝永年間ごろから信士・信女へと変っていく。

年銘を 20 年刻みでのグラフでその消長を見ると、1700 年代（元禄 13 年～宝永～正徳～享保 5 年）が最も多く、1760 年～1780 年代（宝暦 10 年～明和～安永～天明～寛政）に数に陰りが見え始める。1800 年代（文化・文政）に回復するように見えるが、そのころは童子・童女という子供の位号が増えて、その分さらに大人の信士・信女銘の墓塔数は減っていくことになる。

この傾向は、「人口が増大した江戸時代前期に対し、18 世紀半ば以降、人口は停滞期に入った。」とする「江戸時代中期以降の全国人口の推移」（注 6）と合致する。

江戸後期に童子・童女の位号が増えるのは、幼少時の死亡が増えたわけではなく、人口停滞期で少子化が進み、それだけ子供が大切にされ、子供の死を悼んで手厚く供養するようになったからであろう。

また大人の位号は、ほとんどが信士・信女で幕末までかわらず、近現代に多く見られる居士や大姉はない。例外的に 2 例ほど院号がつく信女の墓塔があるが、それ以外にムラの人々の間の階層化は見られず、極めて平等である。また信士や禅定門の男性位号より、信女・禅定尼の女性位号がやや多く、男女間の差がないのはもちろん、如意輪観音像塔の多さや院号がつくなど、女性に対する供養のほうが丁寧であると思える。

5. まとめ

「セイマイ前墓地」の墓塔 173 基と、その裏山の石仏 2 基の調査により、麦丸では寛文 11 年より石塔造立が先祖祭祀として行われ、続いて故人供養の墓塔建立が 17 世紀末から急速に普及したことがわかり、麦丸では江戸時代初頭の 17 世紀前半からムラの開発が進んでいたと想定される。

今回の墓地調査は麦丸全域ではなく、その一部のある一族の詣り墓を対象としたが、江戸時代の姿を留めている稀有な墓地であったことから、北総の江戸期墓塔の一サンプル調査としても貴重なデータが得られたと思う。

注 1. 『八千代市の歴史 通史編 上』 八千代市史編さん委員会 2008 年

2. 『千葉県の地名』平凡社 1996 年

3. 「石造文化財」『八千代市の歴史 資料編 近代・現代Ⅲ 石造文化財』 八千代市史編さん委員会 2006 年

4. 「墓塔」の用語は、小川浩「墓塔が語る村落の歴史と文化―栗野地区の事例を中心に―」『鎌ヶ谷市史研究』16 号 2003 年による。なお、勝田至・編『日本葬制史』では「墓石」、岩田重則『「お墓」の誕生』では「石塔」の用語を使用している。

5. Y 崎家屋号エイジュウの昇さま（85 歳）からの聞き取りによる

6. 縄田康光『江戸時代中期以降の全国人口の推移』（原資料は南和男「幕末江戸社会の研究」）